

## 口頭発表「『最低の飼育環境』からの脱出を目指して」

奥山 聡



### はじめに

これは、すばらしい飼育をして、動物が幸せになり、子どもが育った、というような成功のお話ではありません。獣医の先生から「最低の飼育環境」と言われた状況から、子どもたちを巻き込みながら、できることを一生懸命考えて少しでも改善していくとする経過報告です。

### 1 経緯

私は昨年度檜原小学校に赴任した。当初は飼育委員会とは無縁であったが、様々な課題を目の当たりにして、年度途中で無理をお願いして飼育委員会担当となった。

#### (1) 飼育小屋で起きていたこと

飼育小屋は大きく3つに分かれていて、ウコケイが2カ所で5羽、年老いて動かないチャボが1羽、ウサギが2カ所に分かれて10羽ほどいたように思う。前任校で子どもたちから預かった野鳥を死なせてしまったばかりだった私は、元気のないチャボが気になって、勝手に世話を始めた。結果的にチャボは非常に元気になって、私の姿を見つけると走り寄って来るようになったのだが、その過程で飼育委員会の児童との交流があり、大きな課題を感じるようになっていった。課題とは、次の5点である。

- ①毎週のように子ウサギが生まれ、死んでいった。また、育ったとしても3ヶ月ほどでオスは父親からかみ殺されていた。飼育委員会の児童はウサギの死体を埋めることが常態化していて、心が動いていないように思えた。
- ②エサや水が不足していて、早朝飼育小屋

を見に行くと、全羽のウサギが入り口に殺到してきて、エサ不足は明らかだった。これは、飼育数が多すぎることも、飼育委員の児童が動物の様子を見ないで、形式的にエサをやっていたことも原因だったと思う。また、水は不安定な容器で、中に入っていないことの方が多かった。また、本校はバス通学なので休日は警備委員さんに任せっきりで、世話の仕方も共通理解されていなかったこともあった。

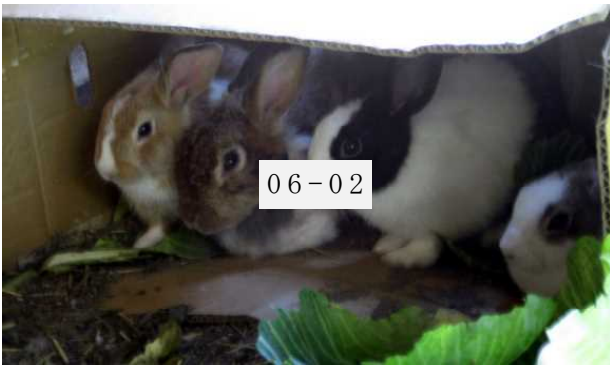
- ③飼育委員会の児童が動物を独占していて、他の児童が触ることができなかった。飼育委員会の児童のための動物飼育になっているように感じられた。
- ④床が土であり、中に人が入りにくい構造であったために、飼育小屋が不潔であった。委員会児童の仕事はエサやりのみであり、掃除は誰もしていなかった。
- ⑤ウサギの心が荒んでいて、常にケンカが絶えなかった。血を流しているウサギを毎日のように見た。

#### (2) 対策として行ったこと

担当者には無断でエサをやったり、殺されそうなウサギを段ボールに移したりしていたが、その中で私に非常になつたウサギが死亡したことを契機に、10月に無理を言って飼育担当として世話をすることにした。初めに取り組んだのはエサを増やすことである。恒常的にエサ不足であったがために、ケンカが絶えないと考え、元飼育委員会担当だった父親に近所のスーパーを巡って、野菜を集めてもらった。(これは現在も続いている。) また、食べられる野草を休日に、を休さらに、ケンカしているウサギを隔離したり、子どもたちの家庭で世話をしてもらったり、それでも解決できなかったウサギは瀕死の段階で自宅へ連れ帰ったりもした。

#### (3) ウサギが増えてしまったこと

エサ不足が解消し、ケンカしているウサギを隔離したことで平和が訪れたのだが、繁殖が盛んになった。これまでは産んだ子ウサギをかみ殺していた親が、安心して子育てをできるようになったのが原因であ



る。ウサギ小屋にはウサギが足の踏み場もないほど増え、毎日段ボール箱3箱も野菜を消費するようになった。

#### (4) 学校へ提案したこと

いよいよウサギが増えすぎて、困ってしまったので学校全体へ「学級で飼ってもらえませんか。」という提案をした。しかし、「それどころではない。」「アトピーの子がいる。」という反応が返ってきて、受け入れてはもらえなかった。これは動物の様子を伝えてこなかった私に原因があると思う。

#### (5) 飼育研修に参加したこと

打つ手がない中、東京都教育委員会主催の飼育に関する研修会に参加した。胸のすくような内容で、思いきってアンケートに「ウサギが増えすぎて困っています。どうしたらよいでしょうか。」と書いてみると、中川先生が壇上から「檜原小の先生、どこにいますか。後で連絡をください。何とかしましょう。」と声をかけてくださった。これを契機に大きな変化が起きた。

#### (6) ウサギの羽数が減ったこと、去勢手術をしたこと

中川先生の紹介で、何羽ものウサギが各地の学校に引き取られていった。また、地元の動物病院の先生にも連絡をつけていただいて、3羽のオスを去勢してもらった。(費用は無料で、申し訳ない思いでいっぱいです。)同時に村の広報誌にも里親募集を掲載したことで、3羽が引き取られていった。うれしかったのは飼育委員会の児童が、複数のウサギを飼ってくれたことである。子どもたちの心も変わりつつあった。

#### (7) 現在の飼育小屋で起きていること

ウサギが7羽、ウコッケイが5羽、チャボが1羽の計13羽が暮らしている。ケンカは完全になくなり、ウサギは互いになめあったり、くっつきあったり、穏やかに暮らしている。課題がすべて解決したわけではな



いが、確実に改善したと言える。ようやく、教育利用ができる環境が整った。

## 2 児童の変化



待ちに待った変容がようやく始まったばかりで、飼育委員から広げていきたい。

①飼育小屋に集まる児童が増加した。本校は下校時にバス発車時刻まで、若干の時間的余裕がある。第4学年の児童を中心に、飼育委員会を超えて毎日のようにウサギと遊びにくるようになった。低学年の児童にも動物の扱い方を教えるようになった。





- ②飼育委員会に関心をもつ児童が増えた。飼育小屋のペンキ塗りを始めたら、あっという間にたくさんの児童が集まってきて、雨の日も自分からペンキ塗りをした。飼育委員会の希望も多くて、選ぶ必要があったと聞いた。飼育に関する話題を職員室廊下に掲示すると、声を出して読んでいる児童の声がよく聞こえる。
- ③飼育委員会を経験した児童が、ウサギを飼う例が多くなった。これまで全羽を扱っていた委員会児童が、1羽1羽の個性を感じながら世話をすることで、ウサギの魅力を感じるようになったようで、保護者を説得して飼う例が増えた。2匹飼う例も複数ある。

### 3 これからの課題

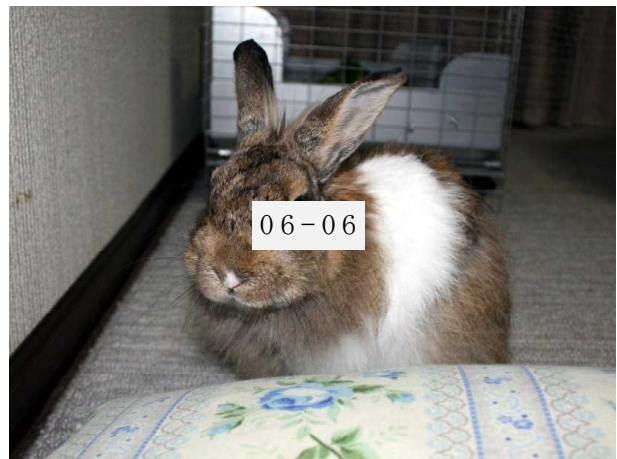
「はじめに」に記したように、本校の飼育改善は始まったばかりである。課題ばかりであるが、いくつかを記す。

- ・学校全体の取り組みになっていない。現在は担当者、そして委員会児童の取り組みである。学校全体の取り組みにならないければ、飼育の教育的な意義としては狭くなってしまう。
- ・飼育舎の改善が必要である。不潔な飼育舎は改善されていない。小屋掃除をしてみななかった委員会児童は、ようやく掃除をしようという気持ちになっている。誰にでも簡単に清掃できる小屋、清潔にしがいのある小屋が必要である。
- ・教員の飼育体験とそれにともなう意識の変容が待たれる。飼ってみた者しか分からないすばらしさが飼育にはある。外から見ればつらくて汚くて、大変で・・・だろうがそれを吹き飛ばすようなうれしさを感じさせてくれるのが飼育である。教員全員が感じて、教育の一環として取り組むことができれば、さらに意義は高まると思う。
- ・指導計画に飼育関係が位置付けられていない。生活科、理科、総合的な学習などを中心に年間を通した計画を考えていきたい。

### おわりに

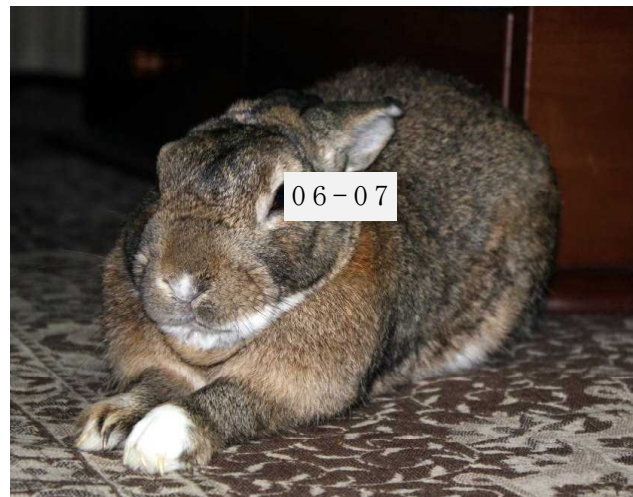
我が家には現在2羽のオスウサギがいます。どちらも仲間からひどいじめを受け、死亡寸前の状態でやってきました。

1羽は居間にいて、両親の心を癒しています。1年間かかってようやく心を開いてくれました。両親の間に幸せそうに目を細



くしてまどろんでいることが多いです。もう1羽はケンカをするので、2階の6畳間を独占する形で飼われています。立ち上がれなくて、4本の脚を外側に広げてへばってしまうような状態で来たのですが、現在は元気そのものです。

朝5時20分には私の顔をなめてきて、「もう起きなよ。」と目覚ましになってくれます。夜は一晩中番をしてくれて、家を出よ



うとすると「行っちゃダメ！」とドアに立ちふさがります。大好きだった旅行に行きたくなくなるくらい、大切な友達です。

飼った者にしか分からない動物の心。感じることで児童の心も大きく成長するのではないのでしょうか。ここには「心地よさの連鎖」があると思うのです。エサと小屋があれば動物は生きていけます。劣悪な環境にもあきらめて慣れてしまいます。「どうしたら心地よく感じるのかな。」と考えて世話を始めると、動物が感じる心地よさが人間にも伝わってきます。それが自分にも心地よくて、他の動物や、クラスのみんなにも「どうしたら心地よく感じるのかな。」と考え始めることで、心地よさの連鎖はス

スタートします。檜原小の飼育は中川先生との出会いを通じて変わり始めました。中川先生も、秋川動物病院の榮山先生も、その行動を通して児童や私に心地よさを伝えて

くれたのだと思います。「最低の飼育環境」からの脱出を目指して進んでいきます。

(東京都檜原村立日野原小学校教諭)

なつお

檜原小学校 第4学年

ある日、  
有名なじゅう医さんが檜原小にきた。  
その理由は、檜原小にいるうさぎをもらいにきたのだ。  
檜原小のうさぎ小屋はせまい。  
他のうさぎにいじめられる。  
なつおはまだ1さい。  
体は小さいので、けんかをしたらいつも負けば  
日に日にふえるきずあと。  
もう肉も見えていた。  
「うわあ、いたそう。」  
私は何度もその言葉をくり返した。  
そして、じゅう医さんが、なつおをケージに入  
「なつおー。」  
みんなは何度もさげんだ。  
私は心の中でないた。  
さびしくてしょうがなかった。  
「なつお。幸せにね。」  
と心の中で小さく言った。

